事	Ą	水田における稲わらの長期連用効果										
ね	Б V	水田への稲わらの鋤き込みは、地力の維持・増進に効果的であり、堆肥などの施用に比べると容易に行うことができる有機物の施用方法である。しかし、連用年数が少ない場合は、水田の地力に与える効果は小さい。 長期にわたる稲わらの連用を行った結果、水田の地力や水稲の収量性に及ぼす影響について明らかになったので、参考に供する。										
	指導	1 水田の地力に及ぼす影響										
	参 考 内 容	 2 水稲の収量と養分吸収に及ぼす影響 (1)連用開始から10年までは減収する場合があるが、連用年数が増えるにつれて籾数が増加し、収量は化学肥料のみ連用した場合と同等以上になり、稲わら堆肥と同程度の増収効果が認められる。 (2)土壌からの窒素供給が多くなり、水稲の窒素吸収は幼穂形成期前から穂揃期にかけて増加し、収穫時の吸収量は化学肥料のみ連用した場合より多くなる。 (3)収穫時におけるその他の養分吸収量は、化学肥料を単用した場合と比較して、カリが大きく上回り、りん酸、石灰、苦土及びケイ酸も化学肥料のみ連用した場合より多くなる。 										
期待	される効と	1 水田への稲わらの鋤き込みが継続して行われるようになり、本県の水田地力の維持・ 増進と水稲の安定生産に寄与する。 2 未利用となっている稲わらの利用促進が図られる。										
利用上	この注意事	1 本試験は、黒石市の灰色低地土水田で、稲わら60kg/aを春に散布、鋤き込みして行った。幼穂形成期前に中干しを行い、基肥窒素の増肥や腐熟促進剤の施用はしていない。2 稲わらの施用は秋鋤き込みを基本とし、施用年数が少ない場合は基肥窒素の増肥や腐熟促進剤の施用などの対策を行う。3 水田の土壌改良目標値に応じた土づくりを適切に行う。										
(担	当 部 署当者名	(齋藤雅人、藤澤春樹) 地帯										

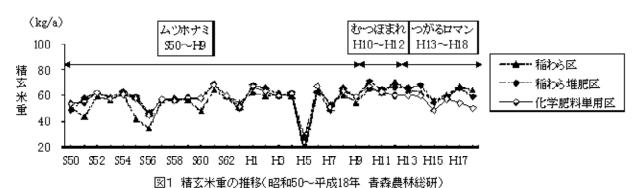
【根拠となった主要な試験結果】

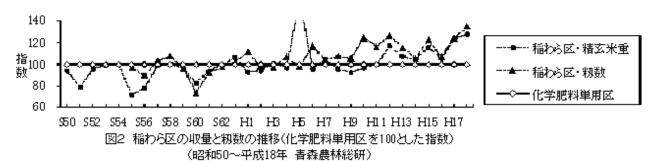
表1 稲わらの鋤き込みが水田作士の理化学性に及ぼす影響

/amalano	~平成18年	士士 本 出手心	ルトナガ ト
コサ学家ロケロク	~446VTX355.		

		孔隙率	仮比	全炭素	全窒素	CEC	Hq	交換性塩基			有効態	可給態養分	
区名		7 GPホ ++	重	土灰衆	土主衆	CEC	pm	(mg/100g)		りん酸	(mg/100g)		
		(%)	単	(%)	(%)	(me)	(H ₂ O)	(20) 石灰 苦土 カリ		(mg/100g)	窒素	ケイ酸	
稲わら区		66.7	0.77	4.68	0.347	22.7	5.2	118	11.4	21.3	14.2	15.0	14.9
稲わら堆肥区		64.7	0.81	4.54	0.362	21.6	5.3	111	13.1	10.5	18.1	12.7	11.1
化学肥料单用区		61.6	0.88	4.14	0.326	20.0	5.2	89	11.1	5.4	19.6	11.1	10.3
稲わら区	H17、H18	108	88	113	106	114	100	133	103	394	72	135	145
指数	H7∼H16	_	85	115	105	105	100	130	121	236	67	_	143
(対化学肥	S60∼H6	_	83	124	116	115	99	130	95	183	63	_	145
料単用区) S50~S59		-	-	114	110	109	99	124	127	172	_	-	-

- (注)1 分析値は平成17、18年の平均値、稲わら区指数は各年次の指数の平均値。
 - 2 化学肥料の施用量(kg/a)は、全区同じ。S50~H9は窒素、リン酸、カリとも1.2、H10~H12は窒素1.1、りん酸1.2、カリ1.3、H13年以降は窒素、りん酸、カリとも0.8。
 - 3 稲わら堆肥施用量は、100kg/a。





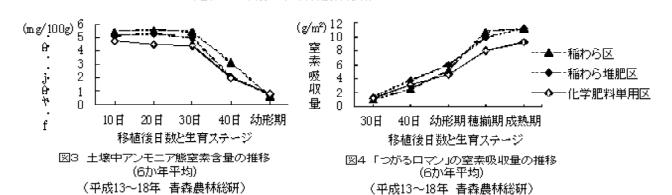


表2 有機物による養分投入量と稲わら長期連用田における水稲の養分吸収

(平成17、	18年	青森農林総研)

											ለ ም መሚግጥ ቀው የሃገ /		
	有機物による養分投入量							水稲の養分吸収量					
区名	(kg/a)						(kg/a)						タンパク質
	窒素	りん酸	カリ	石灰	苦土	ケイ酸	窒素	りん酸	カリ	石灰	苦土	ケイ酸	含有率(%)
稲わら区	0.31	0.17	1.55	0.24	0.06	8.7	1.07	0.57	1.91	0.26	0.16	10.4	7.0
稲わら堆肥区	0.49	0.33	0.55	0.31	0.22	20.4	1.02	0.57	1.85	0.29	0.18	11.2	6.9
化学肥料单用区	_	-	-	-	-	_	0.82	0.46	1.28	0.24	0.14	8.9	6.8

⁽注)1 値は、平成17、18年(連用31、32年)の平均値。

² 化学肥料の施用量は全区同じで、窒素、りん酸、カリとも0.8kg/a。